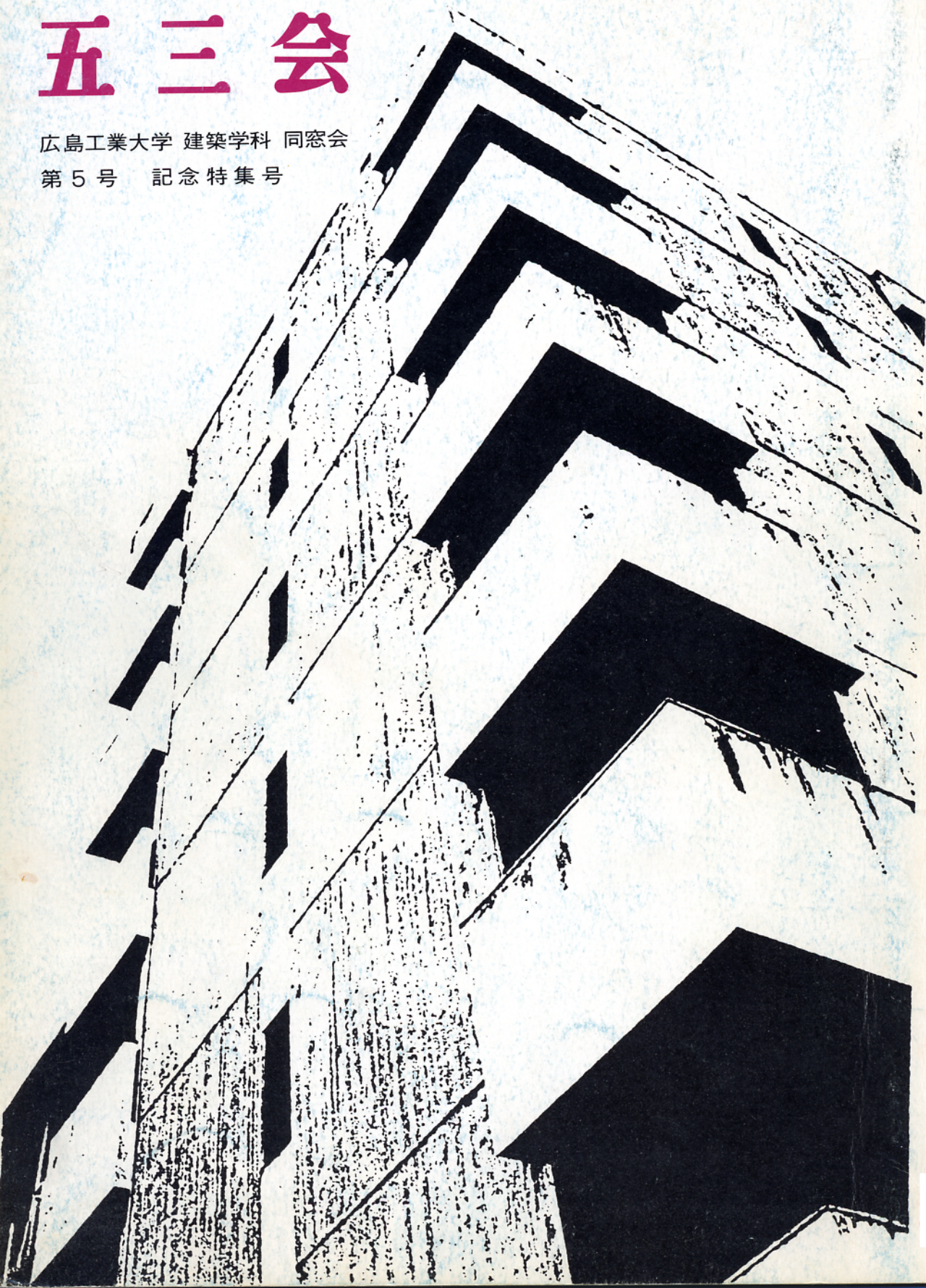


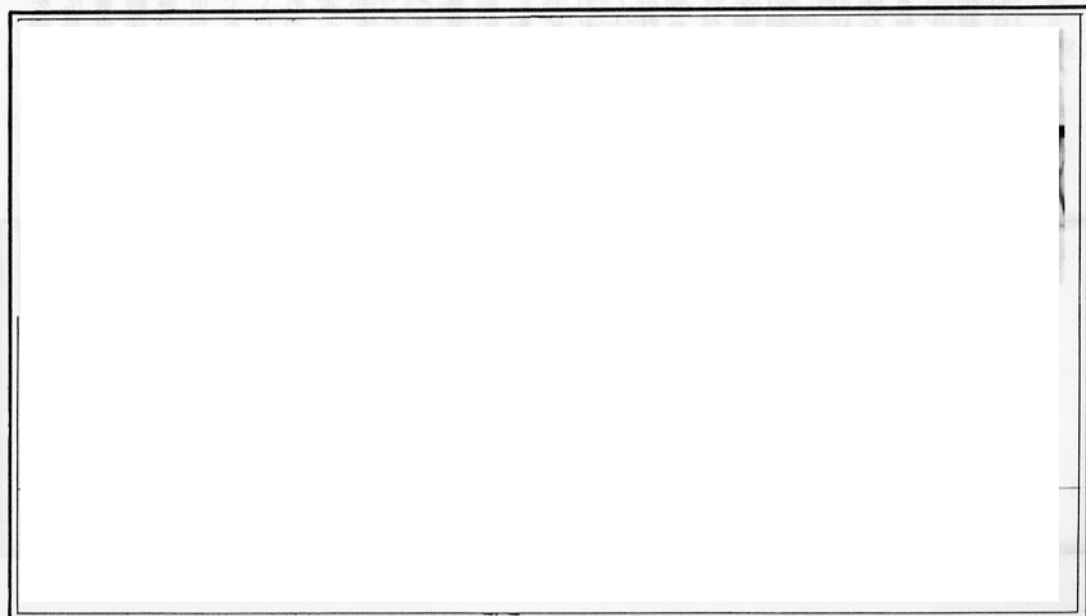
五三會

広島工業大学 建築学科 同窓会
第5号 記念特集号



も く じ

五三会の皆様へ	知野 吉春	1
五三会の五周年に当って	曾根田 彰	2
「五三会」の生立ち		3
役員の変遷		3
五三会活動内容	上之 博文	4
「工大だより」	西川 加祢	5
設計事務所で活躍する工大OB名簿		6
雑感		7
設計事務所を開設した勇者達		13
建設会社で活躍するOB名簿		15
中近東工事を振り返って	山下 剛敬	17
住宅産業で活躍する工大OB名簿		18
広島県の住宅需要構造の実態と展望	金堀 一郎	19
企業と社員	坂本 和人	21
公的資金による住宅供給	徳清 秀夫	22
FALL 1977	上態 徹保	23
官公庁で活躍する工大OB名簿		24
私と建築基準法	吉川 澄生	27
拜啓 同窓生諸兄殿	下 健蔵	28
建築行政に携って	榎本 好数	29
建築行政	林 憲和	29
鈴が峰団地計画	生田 文雄	30
昭和53年3月卒業予定者就職先一覧表		31
第三回五三会コンペ入選発表	村上 徹	33
第四回五三会コンペ作品募集		34
日本建築学会コンペ全国入選		35
広島工業大学建築学科同窓会「五三会」会則		37
第5回総会のお知らせ		39
広島工大建築学科教職員及び非常勤講師名簿		40
編集後記		41



五三会の皆様へ

「五三会」会長



知野 吉春

(四十四年卒)

五三会が発足して早や五年目、我々
広島工業大学建築学科の同窓会は、会
としての一種の区切とも言うべき五年
目を迎えました。

この度その五年目を記念して特集号
あるいは記念号ともいえる会報を出す
ことになりました。今後共この五年目
の特集号を足場にして十年目の特集号
を目標に、会員同志の強い協力と同窓
愛を持つてではありませんか。

五三会が発足して以来、諸先生並び
に役員の方々の暖かい協力で、初代会
長の菅原先生の熱裂なる同窓愛によつ
て、幾度となくつまづきかけた五三会
を導いて下さった事に、私は感謝して
います。私達一期生が卒業して、五三
会は、今年十期生を迎えます。会員も
二千名近くになりました。この大所帯
をより一層繁栄させるためには、会員
全員の協力なくして達し得ません。今
後共会員全員が五三会の役員になつた
つもりで、この会を盛り上げて行こう
では有りませんか。又諸先生方には、
これからもこの会に暖かい御指導と御
援助を御願致します。

さて私自身も四月一日をもって十年

目の建築界での生活に入ろうとしてい
ます。現在は、自分の歩んだ九年間の
反省をし、十年目の目標を考えていま
す。

四十四年三月「皆さんは全員建築界
での生活に入る訳ですが、三年間は自
分の希望して下った職場での仕事に一
生懸命没頭して下さい。」と卒業時に
言われた曾根田先生の言葉が浮んでく
る。その当時は、その言葉の意味がは
つきりとは、分らなかつた。しかし今
考えてみると二つの意味が含まれてい
たのだと私は思う。一つはたとえ希望
して入った職場でも楽な仕事ばかり有
る訳ではない。むしろ自分の予想以上
の苦しい事が多いのである。しかしそ
の苦しさに向けて一年や二年でその職
場が自分には向いていないと判断する
と、外の職場に変わっても、今までの繰
返しになる。しかし三年程度経つと、
今まで苦であつた仕事にも自分に身に
ついた実力と能力によつて、苦が楽に
なるという経験論的な直言であつたと
思う。二つ目の意味は、母校愛とか同
窓愛といったものを意味していると思
う。

それは、我々の広島工業大学建築学
科は、歴史が浅く社会が我々の大学を
理解していない。そのため一期生、二
期生そして十期生と、会員全員が責任
有る行動をすることが、我々の母校並
びに後輩達の将来にプラスになり、そ
してその行動が我々の大学の歴史と伝
統を造り、社会の理解が得られると思
う。

私はこれからも曾根田先生の言葉を

大切にしたい。

最後に私自身の経過を報告したいと
思います。四十四年に広島市役所に入
り、営繕課四年、建築審査課(旧建築
指導課)四年そして営繕課一年が過ぎ
ました。その間様々の事があつた。最
初の営繕時代は、広島市が他の町村と
合併をしていない時代であつたため、
仕事も現在の様には多くなく、課内
の新入社員は私一人であつたため、い
ろんな事を命ぜられ、苦しい生活の連
続でした。しかしそれが私にとって、
どんなにかプラスになつたことかと今
では、良い経騒をしたと思つていま
す。そして四十八年には、異常なまでの建
築ブームによつて非常に忙しい建築審
査課(旧建築指導課)に転課しました。
その年の十二月二十八日に建築基準法
の改正(容積率)が有り私は十二月
夜遅くまで残業をしたことを記憶して
います。又その年は、設計事務所を開
業した人の多い年でもあつた。四十九
年からは、建築界の景気が極端に下降
したため、設計事務所を開業した人達
には気の毒だが、自分の勉強時間が出
来ました。そして五十二年四月再び営
繕課にもどり、今までの経験を生かし
毎日毎日の設計に充実感を覚えていま
す。十年目を迎えるにあたり、今まで
以上に身をひきしめて一生懸命頑張
りたいと思います。……後輩達への直言
「今の自分を大切に、明日に向つて努
力せよ」

完

広島市役所営繕課勤務

五三会の五周年に当って



広島工業大学
建築学科教授
「五三会」顧問
曾根田 彰

五三会の結成五周年をお祝い申し上げると共に、今日に至るまでの会員諸君の団結と努力に敬意を表します。殊に最初の誕生のために尽力された先輩諸氏の御苦労は察して余りある事と思います。これは学内においても、他の学科にはある「○○学科会」が今日に至るも未だ出来ていない状態であるのと同じ困難が伏在していると考えられる次第です。

昔から建築学科の学生は、工学部の中でも自由主義者(?)が多く、これは多分に芸術家を気取る所から生れたものと思いますが、放従で独善を好み団体的な協同精神に欠ける憾みがある様に思います。しかし社会に出て何等かの組織に繋がって仕事を始めると、芸術家ぶった振舞が通用しないことはもう充分味わっておられる事でしょう。いやむしろ建築の仕事が、各方面に関係することが余りに多く、かつ広いものであることを痛感される事でしょう。

例えば設計の仕事においても、一つ

の建築物の機能性を考える場合に、その建物がどんな範囲の人々に、どの様に利用されるのかを見極めようとするければ、かなり広い社会的な知識が内での狭善的な物しか生れないことになりません。またハードの面でも、如何に「デザイン」を得意とする人でも建築構造に弱い人には合理的な形でデザイン能力を発揮することが出来ず、また今日、日増しにそのウエイトを増している各種の建築設備について知識の低い人にも、お気の毒ながら充分自信のある建築を設計することは出来ない筈です。自分の余り得意でない面は他人々との虚心な協力と提携を進んで求める必要がある訳です。

また施工に関係する人は、沢山の下請との人的協調が如何に大切かという事を既に味わっておられること、思います。

或はまた行政の立派の人は、様々な考えと気持をもつ人々に接して相手の気持を十分に汲みとり、また満足を得られる様な説得をすることの難しさを毎日厭とゆう程身を感じておられるに違いありませんが、この場合には大抵相手が同じ建築技術者であることが多いため幸いと云えるでしょう。

いづれにしても出来るだけ多くの人

に接して、お互いに人間同志としての理解を深め合う事が万事に当って非常に大切であり有意義なことである筈です。従って建築界の中でも、学会、士会、協会等のいろいろの団体が有ってそれぞれの立場で活動し親睦を深めておる訳ですが、概して言えば建築技術者の中にはこれらの団体に加入することを敬遠して、とかく独善的な立場に留まろうとする人が多い様に思えるのは遺憾な事と思います。しかし少くとも同じ学園に学んだ同門の士が親睦を固めようとする同窓会(学科別の)にだけは顔を出して、人間的な交わりを深める様に努めることは是非必要な最低限のことではないでしょうか。

今後の社会状況は次第に厳しく難かしい条件の下に仕事を進めなければならぬ方向に向っていると考えられるだけに、この五三会の隆盛を、卒業生全般の将来の為にこそ祈りたいと考えている次第であります。

◆◆◆◆「五三会」の生立ち◆◆◆◆

第五回生が建築業界に出た昭和四十八年の初夏、我々工大同窓生も社会人として、また建築技術者として地域社会の何かの役に立ちたい。そして、建築屋の集団としての社会的責任と自覚を持ちたいと広島工大建築学科同窓会結成の気運が高まってきた。

とき昭和四十八年六月二十四日広島工大菅原研究室にて建築同窓会の準備委員会の初会合をもつ。

○ 組織（同窓会）の目的の確保 同窓生相互の情報交換 技術交流共助 在学生（建築）との交流援助 地域社会の建築文化への貢献等

○ 会則 条案の作成

○ 役員構成組織の運用等

そして第二回準備委員会を同年七月十五日に、そして八月三日第三回準備委員会をもって準備委員会を解散し正式に広島工大建築学科同窓会「五三会」が誕生し、準備委員会は役員会に切り替えられた。

第一期会長 菅原辰幸 幹事長 金堀一郎が決まり、顧問には曾根田彰教授を迎えることになった。

「五三会」（いつみかい）命名の由来は我々は日市町宅で学んだ同胞の集団であるところから採択されたものでありまた「五」や「三」は古来から吉とされていた数でもあり五三会の将来に輝かしい発展を願うものである。

設立当時一、〇〇〇名の組織であったが今日では二、〇〇〇名量質共に無限の可能性を秘めた「五三会」を我々の

手で建築屋集団から建築家集団へと育て築き地域社会の役に立つものにしたものである。

◆◆◆◆役員の変遷◆◆◆◆

▼昭和四十八年度

会長 菅原辰幸(44)
副会長 青木能典(44) 井上隆寿(48)
会計 小田正志(45) 平林三鈴(48)
会計監査 秋本孝(44) 有田三郎(44)
書記 石原勝博(45) 古賀照明(48)
幹事長 金堀一郎(45)

▼昭和五十年年度

会長 菅原辰幸(44)
副会長 青木能典(44)
会計 近松一雄(48) 村上忠義(45)
会計監査 椋田克生(44) 有田三郎(44)
書記 馬場富次郎(46) 稲場
大原順二郎(46)
幹事長 勝田民雄(45)

▼昭和五十二年年度

会長 知野吉春(44)
副会長 勝田民雄(45) 徳清秀夫(46)
会計 河内浩志(52)
会計監査 吉川澄生(44) 津田靖文(50)
幹事長 上之博文(50)

▼昭和四十九年度

会長 菅原辰幸(44)
副会長 青木能典(44)
会計 坂本和人(45) 手越
会計監査 有田三郎(44) 村上忠義(45)
書記 古賀照明(48) 近松一雄(48)
幹事長 金堀一郎(45)

▼昭和五十一年年度

会長 秋本孝(44)
副会長 椋田克生(44) 渡辺武彦(44)
会計 上之博文(50)
会計監査 青木能典(44) 岩田幸二
幹事長 生田文雄(47)

幹事 奥田博俊 秋本孝 渡辺武彦 椋田克生(44) 加藤早苗(45) 馬場富次郎
新谷亭(46) 下健蔵 森田洋生(47) 国広隆英 浜本清衛 大門仁(48) 山台博雄
山田和博(49) 森憲和 秋田邦晴(50) 池田豊(51) 小玉健太郎 山野行昌 背尾宜徳(52)

※五十一年度以前の幹事は紙面の都合で割愛させていただきました。

五三会活動内容

第五期幹事長

五十年卒

上之 博文

我が広島工大五三会の同窓生は約

二、〇〇〇名を数える時代となり、一つの転換時期にさしかかっています。

同窓生が増すにつれ各幹事の仕事量も増えつつあり、皆様の深い御理解をお願いしたいと思います。

さて、活動としては次のような行事を行っています。

▽懇談会

これは、場所は広島工業大学で卒業生と在学生の親睦をはかろうというものです。在学生は、大学に学びながら社会に対しての不安を持っています。卒業生は社会という現場から話し合っ

▽OB祭

大学の大学祭に便乗して卒業生の展示会、活動報告をしようというもので

す。各職場の図面展示、映画、模型、タル酒の無料配布をして在学生にとっても好評のようです。卒業生は十五名ほど参加しています。

▽コンペ

五三会コンペとして卒業生に在学生を含めて、技術向上に、また、新しいものを考える場として社会的に貢献しようとして設けられたものです。

今年は、課題「平和都市広島に建つ文化センター」で行いました。賞金総額も十八万円と大幅アップして募集しました。

コンペについてはまだまだ宣伝不足で出品数の少ないのが残念です。多数の出品を求め、出来たら社会的にも発表したいとも考えています。

▽見学会

卒業生そして在学生ともども、大規模建築の見学会をしようというものです。昨年は「広島基町高層ビル」を見学約三十名の参加でした。今年も「広島少年自然の家」を計画しており、参加者を募集しています。

▽会報

これは年一回発行し、各同窓会の情報場として提供し、様々な企画を行っています。特に今回は五号としての特集号を企画しました。これからも五十号、一〇〇号と続くことでしょう。

▽総会

年一回、五月に開かれます。大学の先生を招待し、同窓生の親睦をはかりながら、思い出話を花と咲かせる楽しい場となっています。現在は広島市を中心に八十名くらいの参加者があり、年次報告も行っています。

その他に同窓会名簿の作成、また、各支部、各職場の交流も当会を利用しています。幹事会は役員平均十五名の参加を持って年十回以上の会合を持って進行されています。皆様の深い理解と参加を期待しております。

L A T 環境設計事務所
勤務

「工大だより」

広島工業大学講師

西川 加祢

めくるめく日

別離と云えば昔より

この人の世の常なるを

流るゝ水を眺むれば

夢はずかしき涙かな

この詩に偶然にも出会ったとき、何か素通りできないものを感じ、手帖の端に書きとめておいたものである。そして味うほどにこの世の無常さと、若き日の夢に萌えた頃のめくるめく日の思い出の甘ずっぱさのすでに遠く離れ去ったことに改めて時の流れを感じる。人生に於て、色々なところで、思わぬところで、何らかの意味でこの「別離」を使うことが多い。「出会い」の時より、「離れる」と云う今まであったものが、自分の身辺から遠ざかる、あるいは無くなると云うことの意味は「離したくない」と思うものほど深く悲しいものである。それは夫婦、親子、友人など、その絆が深いほどに別離は

つらい。この別離のつらさは、しかしながら自分を中心とした見方から相対的に差違がある。特に若者にとっては未知の世界への出会いの喜びの方が大きく、別離の悲しみは、そのかぎに薄れてしまふ場合が多い。そして新しい出會と冒険を求めて前へ進むことに躊躇しない。

卒業生の皆さんも丁度この青春のまったただ中におられることと思います。ふる里は遠きにありて思うもの、青春は過ぎてしまつてから感じるものかもしれない。

このめくるめく人生の変職の中で大卒時代を考へてみると、入学してから卒業までの四年間（余計な道草をしなかつた場合）と云う非常に限定された期間であり、二十才前後の多情多感の時代であつたと思ひます。それも流れる水の如く、今は速くなりつつあると云えましよう。そしてこの三月には新しい卒業生を送り出さなければならぬ頃となりました。その度に送り出す淋しさと、新入生を迎える新たな喜びを交互にくり返すのも大学に勤務す

るものの宿命かもしれません。

このようにして幾度か送り出して早や十年目を迎え、社会で立派に御活躍されている卒業生の方々のうわさを聞くにつけ、キャンパスの中から姿を消していても、その足音は立派に生きつづけており、さらに後輩にとつても目にみえない糸が連なっていることは確かです。そう云つた意味で同窓会は大切であり、大学を守る我々としても積任を感じております。

ここで趣を変えて、建築学科の近況をお伝えしておきたいと思ひます。御存知のように新しい研究棟に移つて早や二年を過ぎました。今までの分散していた研究室も一部を除いて一ヶ所にまとまりました。現在の教職員数は二十名ですが、この三月吉田、山本両先生が退職されるので少し淋しくなります。また今まで構造系の先生が不足気味でしたが、林教授を始め、高松、蓼原の両先生、技術員の松本さんを迎え、かなり充実してきました。また計画系では余り顔ぶれは変わっておりませんが「建築空間論」の水田先生を迎えてい

ます。

肝心な私の近況としましては、研究室は北東側にあり、夏になると陽が当り、暑くて風も入らないところにあります。それでもかつての衝立コーナーから「室」してドアがついているだけでも上々と云えましよう。ゼミは三年生が主体で、室は二十四時間明りがついていると云う相変らずの伝統は守られております。研究活動としては、最近ではミニ開発による建築住宅の社会的問題を中心に、建物内部の計画的問題より、それを取囲む社会的住宅問題としての取上げ方に重点をおいております。大体以上の通りですが、最後に、来年度（五三年度）は林教授と私が就職委員となりますここ数年來の不況とともに、かつてのように求人あまたと云うわけには行きません。もつぱら何らかのコネを足がかりに、就職拡大に努力しております。もしそのような機会がありましたらぜひとも御連絡頂ければ幸いです。それでは卒業生の皆さん、くれぐれも御健康には気をつけて頑張つて下さい。

雑感

アメリカ建築研修旅行雑感

四十九年卒

中島 伸夫

研修旅行に参加して、はや二年が過ぎようとしている。しかし今だにあのルイスカーンの建築空間が脳裏から離れようとしめない。ライトの建築も見た。ルドルフの建築も見た。だがそれらの印象は今では薄い。そうした中で、あのカーンの建築の美しさ、そのドラマチックな演出は今だに興奮さめやらぬものがある。

この研修旅行は、名工大の工藤国雄氏がコーディネーターとなって、一九七七年三月に行なわれたもので、アメリカの著名な建築を十七日間で見ると言う。相当な強行スケジュールのものだった。この旅行では、単に建築を見て廻っただけではなく、著名な建築事務所も訪問した。旧カーンの事務所、ライトなきあとのタリアセン、ニューヨークのルドルフ事務所、そして今話題のパウロ・ソレリーのコサンテ

イ等を訪ずれ、またルドルフ、ソレリー氏とは直接会って話をする機会にも恵まれた。

この旅行中、その訪問する先々で、日本人の建築を学ぶ若い人達に出合った。カーンの事務所、タリアセン、コサンティー、そしてハーバードと、彼らは建築と言うものの真髄をつかみ取ろうと必至になって学んでいた。そこを訪れた我々は、彼らの向学心の旺盛さ、そのバイタリティー、その純真さに心打たれるものがあった。

アメリカに行っておきながら、こう言う言い方をするのも変だが、私はかねてよりヨーロッパ建築を見に行きたいと思っていた。全ての現代建築の原点がヨーロッパにあることは確かだしそのヨーロッパの風土に一時ではあっても浸ることが、まず今の自分に必要なことだと思っていた。だがひょんなきっかけからアメリカへ行くことになり、結果今の自分を見つめた時、あのアメリカと言うエネルギーな環境に建つ、生きとし生ける建築群、そしてそのアメリカで何かを学びとろうと

している人々、それらにもましてすばらしかったカーンの空間との出会いとこれらこそが今の自分に必要なものではなかったかと現在では思っている。

いい建築を見ることが、即力となり肉となつていい作品が造れると言うものではない。しかし、ただ太平洋を飛びこえ、アメリカ国内をグルグル回り歩いた、それだけのことが私に語りかけてきたことは実に大きい。

我々設計事務所に生きる人間は、常に現代に対する問題意識を持っていない。単にカッコイイものを造ればいいのならそれこそ建築雑誌とにらめっこして、思いつきのまま鉛筆を走らせればよからう。ただ私はプランサーでありたい。その為には、常に現代に生きなければならぬ。建築家が現代に生きるとは何か、それはただ単に、事務所に引きこもって、シコシコディテールを書くことでは決してない。建築のみが自分達の世界だと言うのは大きな誤りで、社会に対し、より広い視野を確保する努力こそ今を生きる為の基

となるであろう。

当り前のこと、だけど日々の忙しさに、その当り前のことさえも見失しないうちがちだった自分に、またそれを考えさせてくれたのだ、この旅行の大きな収穫であったと思う。

LAT環境設計事務所

今思うこと

五十二年卒

竹田 謙二

大学を卒業し、設計事務所に勤めだして早くも一年になろうとしている。そこでこの一年間で感じた事を述べて行きたいと思う。まず、学生時代に取組んで来た建築とは歴然と異なる建築のあり方が存在するという事である。これは、学生時代に考えていた建築の在り方が本来の在り方であるといった良否の問題ではなく、学生時代にある程度想像していたことで、その一部を実感したに過ぎない。つまり、様々な要素が複合されている建築の一部であるという事だ。これは、自分がこれから建築を考えて行く上でかなり影響し

てくるだろうし、今影響を受けているのも事実である。ただ自分が今思うのは、これは建築の一部にしか過ぎない要素であり、いつもそのように考えていなくてはならない。これは、私にとって大切な考え方で、極視眼的な物の見方は避けたいからである。次に、学生時代に一諸に建築に取り組んできた仲間との出会いが非常に新鮮である事。

これは、前述した自分とは立場の異なる建築の一部を語ってくれる由で、大変楽しく、緊張感があり刺激になっている。もちろん自分の働いている場の不平、不満、悩みも会話の中の大きな領域を占め、話し手と聞き手が、何度も入れ替わるのである。そして思う事は、飛躍のために絶えず爪を研ぎ続けなければならぬという事である。これは永久的な事で、そのためのエネルギーを獲得するという意味でも、仲間とのコミュニケーションは私にとって大切な物になっている。また、エネルギー発散の場を創る場合にしても仲間の存在は非常に大きい。くだらない事を、思い浮かぶまま書いてしまったが、と

にかく、健康には十分注意し、自分の爪を研ぎ続けていきたい。

アド設計事務所勤務

設計活動雑感

四十九年卒

梶山 孝之

私が広工大を卒業し、建築の実務に就いて、はや四年という年月が過ぎようとしている。このたび幹事の方から何か文章を書くようにと依頼され、自分にとって文章を書くことは苦手ながらもお引受けした、というのもこれを機に過去「四年間の私」の一部でも思い起こし、色々と反省をするよいチャンスだと思ったからである。

四年間の学生時代、そこで建築という専門分野に入り、建築と接触しながら学んできたことがついでこの間のように思える。そして学生時代に学んだことがきっかけになり、建築するということについてのが四年前である。実務に就いて間のない一、二年の間は、諸先輩から色々と建築というものを学生の頃とは別な角度―実務という―から

指導をうけ、あるいは自分で学んできた。未熟な自分にとってはそんな中で経験すること全てが初めてで新鮮であり毎日が変化に豊んだ生活であった。

今思えば一日一日をがむしやらに忙しくやったように思える。そしてここ四年目、実務にも多少なれ、仕事の要領もわかり当初ほどの仕事に対する不安もなく、得てして生活が単調になり毎日が惰性にながれがちになる四年目の今日このごろである。これは逆に言うとう単調になりがちながゆえに惰性に行がちながゆえに今こそ、自分に転換の期がせまってきているのではないかと思えるのである。今までとは別な意味で「自分は何をすべきか」という主体性が問われ、今まで以上に重要な課題となってきたかと思える。

最近特に痛切に感じるものが一つある。それは「設計することのむつかしさ」である。「建築する」という実務に就いて以来ここ最近、いまままでにこれほど強く感じることはなかった。実社会に経験不足の自分が「人間社会の実生活」というものによって、その存

在価値を決定付けられる。建物を建築するということは、あまりにも自分にとって相手が〇大であり奥深く不安が多いことである。そして単にこれ私にとつて不安と同時に興味深いものであり私をより次の段階へと意欲させてくれるものである。

これの一つのくぎりとして、今まで以上に積極的に、建築活動を続けていきたいと思う。

広島総合設計事務所

象設計集団雑感

四十四年卒

山下 正司

大学中退し、3年を広島的设计事務所……建築する事に対しての理想と現実の、あまりの違いに悩み、結果として現実に目を向けた。三K×五Kの二階建てでおおわれた、3K×5Kの二階建て現場小屋を事務所とする象設計集団へ。夏は十時より、冬は十一時頃から動き始め、夜七、八時〜オールナイト。ロケーションに始まり、モケイ、エスキースディスプレイ等が、入

りまじり進展していく。いくつもの提案がなされ、選ばれ、蓄積されていく。

その間数ヶ月／数年に……。現場が始まり、原寸、色、その他が決定されていく。与えられた敷地に立体を作るのが私達の仕事と思うのですが、その場合、今現在、何を、どう作るかが作者自身に問われてくる。ロケーションモケイ、エスキースetcの作業はこの問いに答えるための△あがき▽なのでしょう。毎月毎月写真と共に多くの論文が紹介され、学徒である私達は、△あがき▽の一つとして、これらに探りを入れる。入れればそれだけ不安がつる。

広島にいる頃、情報といえは、これらの雑誌でしかなく、年何回かの連休にリストアップしておいた建築の論文を読み見学するわけですが、いつも感じるのは、論文と現実の隔り（みぞ）だったように思います。いつている事と建物はどうも別のようです。昨年暮のある雑誌で「最近の多くの建築は、わけのわからない論文をとったら、何もなないただの建物……」的中している

のかもしれない。鋭い審美眼と見識をもっていけば、問題はないのですが……。

象へ来て十ヶ月余り、この事務所のエネルギーはもっぱら、多くの現代建築がもつ、理想と現実の△みぞ▽これを埋めるために費されているようです。問いに対してのあらゆる可能性を模索し、方法を見つけだし、進展させ、現実化していく……。

現在進行中の建築……

- 保養施設（山口県）
- 名護総合公園
- 文化会館
- 石川公園
- 低層集合別荘
- 住宅 e t c

追伸……

このところ象のエネルギーはもっぱら二月十四日～十七日のスキー費用捻出にあてられ、五時からは毎日のように、大竹、富田、ヒグチを中心にマラソンしているのです。

象設計集団 勤務

四十八年卒

石田 敏明

早いもので工大を卒業して今年で丁度満五年になります。貯金にたとえれば、さしずめ五年定期という事になりますか。さて東京での五年間を振り返って何が貯ったものか考えてみますと、はたと思ひ浮かびません。少々昔の話になりますが、五年前、図面を抱え単身上京した時の少々緊張した面持ちで、現在在所中の設計事務所の扉を期待と不安をもってたたいたのを今でもはっきり憶えています。あれから五年まさに無我夢中になって過したように思います。最近になってやっと自分を取り巻く囲りの状況や立場がわかるようになりしました。工大とのつながりは、建築雑誌の設計コンペで時々、母校の名前をみつけては楽しんでいた程度ですが、一昨年前から工大の後輩と仕事を共にするようになり、今までさほど意識になかった工大という意識が起きてきたようです。そんなわけで、次第に

後輩とのつながりができ、ここ二年はど毎年のように新しい後輩が上京の際には立寄って行きます。その夜は、たいてい一緒にネオン街に繰り出すわけですが、さすが広島連中は皆んな酒好きで飲むにつれ大学の事、建築の事^{etc.}、について共に熱っぽく語り合うのですが、時々後輩の言葉の端々に生き生きとした情熱を感じる事があります。そんな時、この情熱がいつまで続くのだろうかという疑問とずっと続けばいいのになあという期待とが入り混った複雑な気持ちになります。撲自身、今迄に何度か挫折しかけたしこれからもおこりうるだろうと思っっています。どんな仕事でも、その道のプロフェッショナルになるということは、大変な事に違ひありません。撲自身、プロとしての自覚をもって仕事をしていて、いつも完璧なものを目指しているのですが、いざ建物が出来上ってみると、毎回あそこをこうすればもっと良くなったのではと反省しきりです。次回には完全に満足できるものにしようと望むのですが又、新たな不満がでてきます。当

分、こんな状態の繰り返しが続きそうです。言い方をかえれば一生、試行錯誤でよいのではないかとさえ思っています。その行為を止めたら、もう先に進めなくなるのではないのでしょうか。設計をやっている以上、常に完ぺきなものを目指す態度でありたいと常日頃から心掛けています。

アーバンロボット勤務

無 想

五十二年卒

衣笠 准一

私が学生の組織から脱して、社会の組織、設計事務所組織に入ってから約一年。その間に考えたことは、「論より証拠」である。我々が一つの計画をするにあたって、様々な条件というものを当てはめて考えていく。

例えば、建築による意味の表現一つとってみても、壁の意味、柱の意味。それを、媒体としていっているのであり、例えば、音楽のごとき、耳に聞こえる物理現象としての音にメロディーを与え、建築

による意味も又例外でなく、情緒的昂奮の「発散」はそれだけでは表現の十分な条件とはならない。媒体の形成を通して始めて表現は具体的にされ、我々が経験する流れは、耳に聞こえる音や眼に映える風景と客観的に関連するのであって、そこから意味の表現も関係づけられるものと思われる。建築的に表現される意味は、主観的、内部的な衝動、情緒としての感情たるだけに終わるものでなく客観的、外部的な物からの抵抗、緊張に媒介されている。感情とに客観的な物に対する、物から物についての感情なのであって、そのかぎりでは感情は、かならず、知的な要素を含んでいる。時として、我々が感ずるインスピレーションといえども、かかわっている外界からの抵抗から生起してくる燃焼なのであって、それは環境と相互作用すべき抵抗と緊張から発生してくる、生きることのエネルギーが働いてくるのではなからうか。我々の態度と興味の中には過去に蓄積された意味の背景が横たわっているのであって、そこには伝統とか、慣習等が

あるとはいってみても、我々の態度と心が単なる伝統、慣習の虜であってはならぬことは論をまたぬのであって、それに、加えるに、天賦の独創力を必要としているのであって、過去において、ひとまず組織化されている古い意味の背景と未来における新しく創り出されていくべきものへの興味とが衝突、結合されようとするところにインスピレーションがあり、イルミネーションがあり、イメージーションがあるのである。はなかるるか。従って我々が計画するにあたって、想像力というものは、常にある種の冒険心をともしなければならないけれども、物的ならびに人間的な環境と相互作用することによって、自己を過去、現在、未来への連続させようとする我々の想像力と設計活動の中には、当然、変化するものの中における、一貫したものの認識と、見て感じる経験の仕方における、特定の計画と型が必要になってくるのではなからうか。

近代設計コンサルタント

勤務

俺の生きざま

四十八年卒

近松 一雄

五周年記念お目出とうございます。

俺は今、四帖半十一間の押入+半間の台所の容器、空間……木造二階建木質アパートで生活している。俺は毎日を忙がしく働き蜂の様にチョコマカ、チョコマカ、ブーン、ブーン、所かまわず、飛び回り、這いまわっている。俺は俺の体と心をギリギリの状況（境遇）へと追い込もうとしている。俺は俺の考えている何事も実行出来ない俺の腹立ちを感じている。俺はいつも他人のことで気にしている俺に、実のところその逆であろうことに俺は気づいていない。俺は今、俺がものに対して何を語ろうとし、何を意味しているのか分らないという言葉で、俺に云い聞かせている。—— Why と俺に問うてみる姿勢——。俺は今、何かを欲している俺が分らない。………そして、俺は俺であり、俺でない俺にしっかり着眼し、地につけて、見極めようと努めて

いる俺に対し、哀訴をつく時が来るだろう。いつの事やら。今の俺の域は、過去の俺を台として、懸命に未来の俺へと投影し、より近づく、俺の姿に、時として肩を浮かせたり、時として打ちのめされた俺も見もし、時として、俺に云い聞かせたり、卑下したり、時として、俺を下げさせることで俺の生きざま対人関係を知ろうとし、時として左図のようになるであろう俺にハッとするであろう。

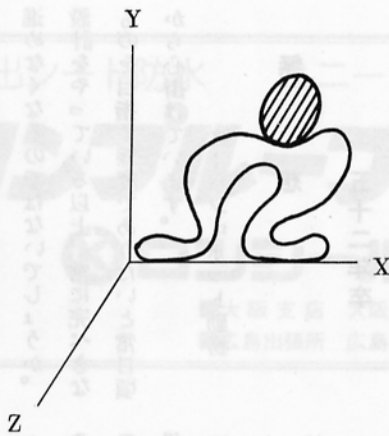
かな………)

この文章は今だけである。

今は故、今和尚如く、てめい生意気こくじゃねえ!!

総合計画コンサルタント

勤務



尚、未来の俺は、死（いっぴきのいきもの）へ近づくことに全力でぶつか覚悟である。（すこし格好よすぎる

昨年の三月、十五日間にわたって、

「ヨーロッパ古代・中世・現代都市建築視察と研修の旅」というツアーに参加することが出来た。引率者は早大講師の渡辺洋治先生で、東京を中心に沖縄から北海道までの学生と社会人半々という構成であった。

コースは建築の源流であるイタリアを中心にローマからナポリ、フロレンス、ボローニヤ、ベニス、ミラノなど十五の都市建築をバスによって見学、そして列車でスイスに入りベルンよりコルピュジェの代表作、ロンシャンの教会堂を見学し、パリに向ってヨーロッパの最後を楽しんだ。

ヨーロッパに対して様々の期待と不安を持って出発したが、期待以上のすばらしいものであった。特に歴史、光色というものを強裂に私の心に焼きつけたものである。イタリアの山岳都市は山上に位置し、各住空間は、あたかも岩山のごとくたちあがっている。町は十三、十四世紀の空間をそのまま残しており、その土地にある石で道を敷

き、家を壁を積み上げ作っている。その中でもアッシジの町はピンク色の石を用いており、床と両壁の石に囲まれるとその中にさし込む光はピンク色を持って感じさせる。日本の建築は火に弱くまた水にも弱く、時代と共に建築は変化する。しかし、石で出来たヨーロッパの建築は一度作るとそれは歴史を作り始める。そしてそれは町に歴史となつてたちあがる。

また、待望のロンシャンがバスの窓間から山の頂上にみえた時は、すごい騒ぎとなつた。ロンシャンの周囲はこんもりとした緑に囲まれて白くゆつたりと生きていた。バスからおりると、私も含めてみんなは無意識のうちにかげ足で向つていった。

ロンシャンは、ほんとうに白く美しくかつた。しかし写真で見ると、そんなに大きな建物ではなく頭の中に空間を把握出来る。中に入るとモデールで刻まれた窓が色を待って私達に訴えかけてくる。赤は燃えているように青はすんで、それぞれの色が共鳴し合い私達に迫る。

日本の建築はアメリカ建築をみる。しかしアメリカ建築は長いヨーロッパ建築を土台としている。だからアメリカ建築をヘタにまねると大変なことに

なる。私もアメリカ建築にあこがれ見たいと思つたが一度ヨーロッパの建築とくにイタリアの空間に接した時、私はその考えを変えた。ヨーロッパの空間は深く美しい。日本の建築は広場だ、レンガ建築と作っているが、表面的な材料を用いても、あのヨーロッパの美しさは作れない。空間を持って来ないと、そのほんとうの美しさは作れないと思います。

さらに、私は日本の古建築に対してほとんど興味を持たず現代建築を追つていたような気がするが、ヨーロッパをみて日本の古建築の偉大さを大きく感じたのである。というのは、ヨーロッパは石が豊富で、重く強く土の中から出てきたように都市建築があり、人がうまくそれを利用して共存しているように見えて自然で美しかった。同様に日本の建築は豊富な木材があり、歴史的にも植物的な素材を持って桂離宮は構成され自然である。

現代の日本の建築は様々な材料を欲求に応じはりつた「住」にもみえて、自然でなく落ちつかない。建築は自然というものを大切にして共存し、歴史と共に深みのある建築こそ、住みやすく美しい建築ではないかと感じたものである。私は次の機会もアメリカを見に行く前にもう一度ヨーロッパを見に行きたい。(L.A.T環境設計事務所勤務)

中近東工事を振り返って

四十九年卒

山下 剛敬

日本から空路十六時間、アラビア半島東部ペルシャ湾に突き出したカタール半島、面積二万二千四百平方キロメートル、人口十五万人、産業と云えば石油だけの典型的中近東の小国、カタール共和国、これが初の海外工事を経験した国である。国土のほぼ全域は、砂漠で、最高気温四十六度、直射日光の元では六十五度を越える酷暑、時として吹き荒れ一寸先の物をも視角から消し去ってしまう砂嵐、この様な国内では想像も出来ない過酷な自然条件の元で変電所建設工事に一年間従事したのである。高温乾燥と云う砂漠気候は当然の事として工事管理の種々の面に影響した。その中でも特に影響を受けたのはコンクリート管理である。一般に国内工事に於けるコンクリート管理の方法は品質管理を生コン業者、施工方法打設、養生等を施工業者が行なっているのであるが当工事に關してはその全てを我々施工業者が行なわねばならなかったのである。その上使用コンクリートの仕様書がイギリスのものでありス

ランブ七十センチメートル、圧縮強度二百四十キログラム/平方センチメートル以上と言う厳しいものであった。自然条件と人為条件、この二つの厳しい条件下でのコンクリート打設は延五カ月間の夜間作業を行う結果になったのである。工事の支障となったものとしてもう一つ風俗、習慣を忘れてはならない。現地労働者の大多数は戒律のきびしい回教徒である。十時と十五時の一日二回いついかなる時でも聖地メッカに向い祈りをささげる。当然その間工事は小休止である。それ以上に始末に悪いのがラマダンという回教の祭礼である。八月二十五日から一カ月、太陽が地上に顔を出している間中断食を行うのである。食事、飲物、嗜好品一切を口にしない期間なのである。この間は限られた回教徒以外の労働者だけが頼みとなるのである。自分を取り囲む環境が変わると人間は必要以上に神経をすり減らすものであり、それを回復させてくれるのが仕事を離れての一時のはずであるが、カタールに於いてはそれさえも満足のいくものではなかった。食生活はパン、外米、肉類が主であったが日本のそれとは比べものにならないほどであった。当分の間は鼻をつまんで食事をする日が続いた。

娯楽にしても麻雀、読書、釣り、国内から送ってくるカセットを聞く位のものであった。この様にして約一年カタール変電所(サブステーション)は完成したのである。目も口もふさいでしまふ砂、体中の水分を奪うのではないかとさえ思える猛暑、勤勉とは程遠い現地労働者、楽しい思い出は何も無かった様に思える。しかし自分達の手で一個の建物を異国に作り上げたという喜びは何物にも変えがたいものであった。

五洋建設 国際事業本部国際工務部
部建築課勤務



広島県の住宅需要構造の

実態と展望

四十五年卒

金堀 一郎

石油ショック以来景気の低滞と共に
 我国の住宅着工ペースは昭和四十七年
 一八〇万戸、四十八年一九〇万戸から
 四十九年には一三一万戸、五〇年一三
 六万戸に落ち込んでいる。五十一年に
 やっと一五三万戸に回復しているが、
 これがむしろ世帯数、住宅ストックから
 みて我国の適正な住宅着工量でありこ
 こ当分年間一五〇万戸台のペースが続
 くと思われる。

さて広島県であるが四十八年に五万
 千三百戸であったものが四十九年には
 二万八千五百戸、五十年二万七千九百
 戸で五十一年には三万九千九百戸に回復し
 ているしか、五十一年で四十八年実績
 の六十一%にしか達していない。これ
 は全国レベル(八十一%)より大巾な
 低位回復であり、石油ショック以前は
 広島県は全国レベルより常に高い水準
 の住宅着工を示していただけに県下の
 住宅業界にとっては深刻な問題となっ
 ている。

では広島県の住宅着工統計を分析し
 需要構造の実態を調べ今後の展望をみ
 たい。

★ 木造住宅市場性

五十一年中に県下で二万一千戸の木

造住宅が建築されているがこれは着工
 総数の六十六%強であり住宅着工のピ
 ークであった昭和四十七年、四十八年
 には五十%前後であった木造比率に比
 べ伸びている。木造住宅は景気による
 変動性が小さくまたユーザーのニーズ
 も強く今後も県下で年間二万戸強の着
 工量が見込まれる。しかし県下には木
 造建築、大工工事の事業所が三千十六
 ケ所(S四十七年事業所統計)あり、一
 事業所当りでは年間六・六戸となりこ
 れは木造建築業がいかに零細であるか
 を浮彫りにしている。しかし2×4等木
 造住宅の合理化と共に今後は年間百棟
 (三百棟建てる立場に密着した中堅の
 ホームビルダーがいくつつか新たに台頭
 してくるであろう。

こうして住宅は木工(ととりよう)
 が建てる時代から住宅企業が生産する
 時代へ移行するものと思われる。

★ 分譲住宅の動向

広島県の住宅市場構造の特異性の一
 つに分譲住宅比率の高いのが上げられ
 る。五十一年に全国平均で一・九・八〇
 %であるが広島県は二二・三二%であ
 る。(表①②参照)

さらに五十二年度八月までの実績から
 推計すると広島県の五十二年中の分譲
 比率は二七%(八千三百戸)前後にな
 るものと思われる。

広島は地価水準が高く平地の宅地が
 少ないゆえ過密な一戸建住宅の需
 要が高いのも一因ではなからうか。

全国的な傾向としても分譲住宅比率
 は年々高くなっておりアメリカの分譲
 住宅比率(六十八%)までゆかなくとも四十
 %程度までには到達するのではあるま
 いか。広島経済圏でもスプロールした
 周辺住宅団地から市街地近郊の建売住
 宅や市街地のマンションへUターンす
 る世帯が増つつある。交通整備の遅れ
 た広島では市街地近郊の土地付高密度
 住宅(建売住宅・タウンハウス)と市
 街地の分譲マンションが再び脚光浴び
 伸びてくるのではあるまいか。

★ 建替需要について

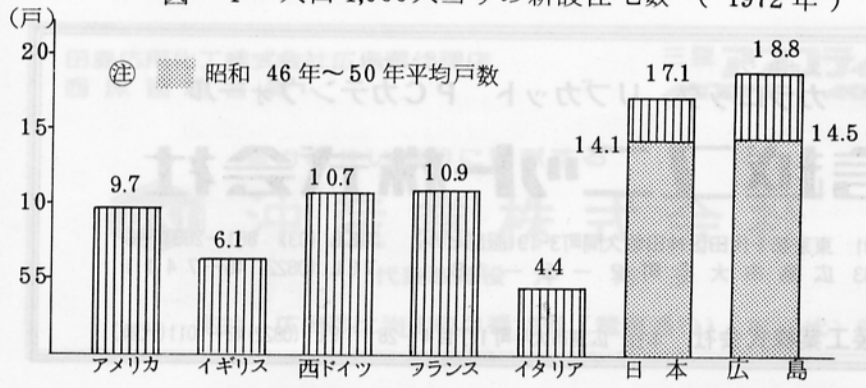
住宅市場は量の充足を終え質の時代
 に突入し建替需要が大きな市場を形成
 しようとしている。因みに広島県の住
 宅総数は七十五万六千戸(昭和四十
 八年住宅統計調査)で空家が四万二千
 七百戸あり空家率五・六五%となり住
 宅ストックの量的充足を終えたとみて
 よい。

さて建替需要の予測のため県下の一
 戸建住宅ストックを拾うと五十万二千
 二百戸(住宅産業研究所調べ)であり
 これに年間建替比率二・七九%(日本
 不動産銀行推定値)を乗ずれば一万四
 千戸となり広島県下で年間約一万四千
 戸の建替が予測できる。

今日までの需要の過半は世帯数増加
 需要(人口増世帯の細分化)と空家需
 要(借家、別荘)等、新規需要で占め
 ていたもの(昭和四十三年〜四十八年
 の平均では新規需要が六二・五%)で

あったが、住宅ストックの充足を終え
 それに加え我国経済の低経済成長への
 移行のものと住宅市場構造は新規需
 要から建替、買い替、需要へとその主
 流が近年中(五十四年頃)には、移行
 するものと考えられる。
 (株)共立ハウジング企画室勤務

図-1 人口1,000人当りの新設住宅数 (1972年)



表一① 我国の着工新設住宅の概要

(1) 利用関係別 (戸)

	48年	49年	50年	51年
合計	1,905,112	1,316,100	1,356,286	1,523,844
持家	764,996	680,763	704,154	712,762
貸家	702,928	358,800	376,128	474,875
給与住宅	70,487	43,365	38,213	34,458
分譲住宅	366,701	233,172	237,791	301,749
分譲住宅のシェア	19.25%	17.72%	17.53%	19.80%

(新設・増築又は改築によって住宅の戸が新たに造られたもの)

(2) 工事別 (戸)

	48年	49年	50年	51年
合計	1,905,112	1,316,100	1,356,286	1,523,844
新築	1,698,421	1,138,560	1,166,736	1,329,380
増築	152,954	128,361	134,993	134,662
改築	53,737	49,179	54,557	59,792

(3) 構造別

	48年	49年	50年	51年
合計	1,905,112	1,316,100	1,356,286	1,523,844
木造	1,120,484	869,637	907,389	992,966
SRC造	163,956	74,150	63,580	80,326
R C造	379,614	212,893	214,259	248,163
鉄骨造	215,172	141,881	154,180	188,446
C B造	24,301	16,912	15,423	12,686
その他	1,585	627	1,455	1,257

(4) 建て方別 (戸)

	48年	49年	50年	51年
合計	1,905,112	1,316,100	1,356,286	1,523,844
一戸建	1,163,549	942,690	972,675	1,025,293
長屋建	741,563	374,010	383,611	498,551
共同住宅	978,317	796,768	824,325	865,925

表一② 広島県の着工新設住宅の概要

(1) 利用関係別 (戸)

	48年	49年	50年	51年
合計	51,355	28,521	27,924	31,904
持家	16,151	14,658	15,000	15,891
貸家	23,278	7,545	7,415	7,498
給与住宅	1,931	1,362	842	1,388
分譲住宅	9,995	4,956	4,667	7,121
分譲住宅のシェア	19.46%	17.38%	16.71%	22.32%

(2) 工事別 (戸)

	48年	49年	50年	51年
合計	51,355	28,521	27,924	31,904
新築	48,511	26,410	24,737	28,069
増築	2,587	1,929	2,987	3,633
改築	257	182	200	202

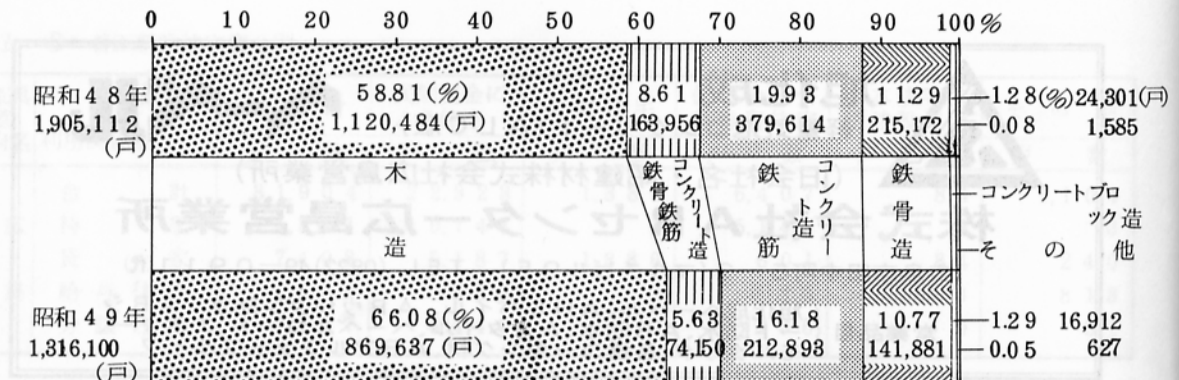
(3) 構増別 (戸)

	48年	49年	50年	51年
合計	51,355	28,521	27,924	31,904
木造	23,991	17,410	17,707	21,137
SRC造	3,801	1,081	329	658
R C造	12,835	4,577	4,920	5,049
鉄骨造	10,397	5,306	4,692	4,889
C B造	330	147	233	162
その他	1	0	43	9

(4) 建て方別 (戸)

	48年	49年	50年	51年
合計	51,355	28,521	27,924	31,904
一戸建	26,633	21,066	21,714	25,251
長屋建	24,722	7,455	6,210	6,653
共同住宅	21,560	16,677	17,178	20,418

図一 2 着工新設住宅構造別総括



〔備考〕 建設省の住宅着工統計資料を分析したものである。

企業と社員

四十五年卒

坂本 和人

今年で広島工業大学建築学科も第十回の卒業生の方々が出られますが、しかしながら、世の中不況不況で大変苦しい時期を向えております。この様な時期こそ、我工業大学建築学科卒業生の力を一つにするチャンスではないでしょうか。

以前ある雑誌で読んだ記事が、今でも頭に残っており、それを今回紹介しようと思います。ウイスキーメーカーのサントリーのことが書いてあり、洋酒メーカーと我々建築関係に携わる者にとつてあまり関係のないことかも知れませんが、企業方針の中に何か共通するものがありそうです。

記事の初めに今、世界で最も飲まれているウイスキーはサントリー・オールドであるとか。これはなかなかおもしろそうな記事だと思つて読んだのです。以前はアメリカのメーカー品であるセブントラウンがトップであったのをオールドが抜いてトップになったが世界一になるには、企業もさることながら社員も大変な努力があつたからでしょう。

今から十数年前、ウイスキーの自由化が問題になり日本の洋酒メーカーは苦しい立場に立たされ海外の有名ウイスキーとの競争に不安をいだいた。各メーカーとしても何らかの方法を考え

なければならなかつたが、サントリーの場合はさつそくどの銘柄を主力に押しつけて販売するか。その第一に「オールド」を選んだ。これが世界一へのきつかけとなつたのでした。しかし当時はウイスキーと言えば洋酒喫茶、バー、クラブで飲まれるのが相場で、一般人が飲むにはかなり高価な酒だつたようです。サントリーとしてもこのままでは限界があると判断し何とでも市場の拡大を計るべく、「二本の箸」作戦なるものを打出して、日本料理店、寿司屋等に、販売の目を向けるのですがその方面の店といえば、今でこそウイスキーの置いてない店はないとしても当時はそこで飲む酒は日本酒。そこそ販売に行つても塩はまかれるし、あまりの営業マンのしつこさに板前には包丁を振りかざされるはで、まったく相手にされなかつた。しかしあるポスターが大変な反響をよんだのです。そのポスターというのは、寿司屋の主人が店の終つた後でカウンタに座つて静かに飲んでる酒が「オールド」。これが宣伝部門の賞である電通賞を取つてから各方面からの取引きに結びつくきつかけとなつた。各地からの注文が増え出したある日九州の特約店からの妙な注文で「たぬき」を送つて欲しいという電話。これでそれまでのオールドの愛称「黒丸」が「たぬき」となつたのです。この愛称が広く一般の家庭にまで言われる様になり、メーカーの判断の早さ、切換えの早さの大切さをものがたつています。

しかしそれだけで世界一になれる訳がなく一番の大ヒットは何と言つてもボトルのキープにあつた。みなさんの中にもかなりの方々が一つ、二つの店でキープされておられるでしょうが、「オールド」は、上は社長から下は平社員にまで飲まれる巾広い客層を持っているウイスキーとか。キープによつて、メーカーは安定した出荷が見込めるし、店は固定客が出来るし、又、客の方は自分の店でも持つたみたいに得意になるし、つい友人でもさそつて、ちつといい気持を味わうといった具合に、一石二鳥の効果があつたのがこのボトルのキープ。

このキープ商法が最も大きな基盤になつて世界一になつたと結んであつた。私の頭に強く残つているのは何と言つても當時を振り返つて悟つて居る社員の話でしょう。

「自社はどこにも負けない熟練された職人が原酒から製品まで造つて居る。だから我々は、それを自信を持つて売ることが出来た」と。

以上思い出しながら書きましたが、ここ数年事あるごとに不況不況であるしかし企業の中で生きる以上、自社に対する自信、商品に対する自信が大切ということを知らされたもので

永大産業(株)勤務

公的資金による住宅供給

四十六年卒

徳清 秀夫

公的資金による住宅供給は、その建設の方法から次の二つに分けられる。

① 公的機関が直接に建設を行ない賃貸住宅又は分譲住宅として供給するもの。

② 民間の住宅建設に対して公的機関が長期低利の資金を融通し又は利子補給を行うもの。

①に該当する住宅供給制度としては主なものとして、都道府県及び市町村が建設・管理する公営住宅及び改良住宅、日本住宅公団が供給する公団住宅、地方住宅供給公社が供給する公社住宅等がある。

②に該当する主な住宅としては、住宅金融公庫の融資により建設される住宅等がある。以上の他いろいろな供給手法により公的資金による住宅供給がされているが、過去の実績を見ると、公的供給と民間自力供給の割合は従来から四対六の割合で推移している。これに対して民間比率の特に高いアメリカ（九八・パーセント）を始め、欧米諸国は概して民間比率が高い。この

ことは、日本における住宅価格（土地代を含む）が所得に対してあまりに高額であることを物語っている。

公的賃貸住宅をもっと多く建設すべきだという意見があるけれど、公的賃貸住宅というものは、やはり老人世帯とかあるいは特に所得の低い方々に対してはぜひとも必要なものであると思う。そういった方々に対しては、公営住宅あるいは公団賃貸住宅等を十分供給する必要があると思う。ただ従来に比べて、今後建設する住宅（民間自力建設を含んだ）の中の公的賃貸住宅の割合を大幅に増加せよということは果たしてどうだろうか。やはり地方公共団体の実情とか国民の希望の実態から見てどうかと思う。公的賃貸住宅へ入るよりは公庫融資を受けて持家を持ちたいんだという方々の要望も多いわけだ。そういった方々の全部に持家取得可能な額（全部ということではなく）を長期で低利の融資といった間接的な援助を行なった方が良いのではないかと思う。もっともそれには十分な量の宅地の安定供給が準備されておく必要があることは言うまでもない。

公的住宅供給については、都市地域への人口集中に対応するとともに核家族の進展に対応して少人数世帯向けの

住宅が中心になってきた。こうした住宅供給が核家族化を助長するという現象を招いた。高齢人口の増大が進むにつれて、老人問題が福祉対策上重要な課題となってくる。こうした状況に対応するため量から質の時代に移行した現在には住宅対策も従来の核家族を助長する形態の住宅供給から数世代の家族が同居又は親密居住できるように多様な住宅供給を行なう必要があると思う。

広島県庁住宅課勤務

広島市の

人口・世帯・面積

人口 864,820人
 男 427,148人
 女 437,672人
 世帯 312,132世帯
 面積 673.97 km²
 (昭和53年1月1日現在)

表一③ 着工新設住宅資金別

都道府県名	資金別 利用関係別	総計	民間資金による住宅	公営住宅	住宅金融公庫	日本住宅公団	その他
		戸数	戸数	戸数	戸数	戸数	戸数
広島	合計	31,904	22,923	1,386	6,407	84	1,104
	持家	15,891	10,746	0	5,145	0	0
	貸与住宅	7,498	5,187	1,386	601	84	240
	分譲住宅	1,388	550	0	25	0	813
	分譲住宅	7,127	6,440	0	636	0	51

四十九年卒

上態 徹保

December 1977 fall 私はロ

スアンジェルスで三回目の秋をむかえています。スカイスクレーパーはいつも同じ顔をしているし、それをスモッグでいぶしその下での人々の生活。乞食とリッチマン、殺人とチャリティー善と為善。ラジオ、TVのスイッチを入れるとクリスマスソングが人々を年の暮へとせきたてていきます。それに税金の払い込みが人々の顔をくもらせ政治家、ポリスマンへの不平がつっています。

私は先日、学期末の試験を終え、これから年の暮にかけ学費と生活費のためにアルバイトにおられます。昨年もそうだった。また今も、クリスマス夜の、各家々では楽しいクリスマスパーティーそしてサンタクロースの来る夢を見ながらベットにいるころ、人の来ない客を持ってコックと二人やけくその酒を飲みながら将来の夢を語り合うそうした日がまた来ました。しかし私たち留学生はだれにも負けることのないデッカイ夢を持っています。今の生活が苦しいほど苦しいほど我々はたがいにお互に助け合い、後に来る夢の現実の為にその一歩を確実に地につけ前に進んでいます。しかしながら多

くの友が夢中途にして消えてゆくそれが私たちにはたまなく寂しいのです。その人の生活態度が謙虚であればあるほどそれは大きいのです。『財政的困難、病氣、語学不十分からくる成績の低下、仕事からくる疲労、睡眠不足』

どれもこれも留学生のかかえている問題です。私の生活は、生活費と学費のかてとして、レストランでのウェイター、フラワーショップでの生花、設計事務所での仕事、ときどき建築現場での通訳、地方公共団体からたのまれる都市計画の資料あつめとレポート、それに本業としての院生としての学問。

私のスケジュールは週七日ではなく九日制になっています。さいわい学生時代に鍛えた体とねばりは今になって生きている思いです。クラブに体育局に燃した情熱は決して無駄なエネジーではなかったと。そうした時代を持てた大学『工大』に感謝しています。そうした日々週二回座禅を組みに出かけています。というのは、日々の生活のいそがしさのために自己を失い、道をあやまる、そういう気がするからです。それに人との出合、そして離別があまりに多すぎるのです。それはとても淋しいことなのです。静かに座してメディテーションをしているとまた自己をとりもどすのです。

こちらにいる日本人(アメリカ人以外)には二種類あるように思われます。一つはその人がアメリカの性格に合っ

ているのでしょうか。いわゆる『アメリカライズ』してゆく人。私にはその人々たちは、ただ生活の墮落、礼儀、節度のなさとしが受けとれませんが、もう一つはアメリカの生活にとけ込みながらも日本人としての誇り、日本文化、民族のスパラシさを新たに認識してゆく人です。先日友が言っていました。

『私は、あのアメリカの住宅、スカイスクレーパーに誘われて留学したけれど今私は大学で茶室と庭園の研究をしています。みんなすくなくならずこうなのです。大学院で学ぶテキストブックの中にはかならず日本文化、建築技術、哲学の深さを称賛しているのです。それに学生、教師の大部分は東洋文化とくに中国、インド、日本に興味を持っていると言っても多言ではないのです。先日ある日系の新聞が述べていました日本の商品は安くて品質も良い。したがってだれ差別なく受け入れられます。日本の技術のスパラシさは世界の知るところです。今やリニアパナリニック、ダットサン、トヨタ、すべてがアメリカの家庭のすみずみまで入りこんでいます。しかしながらなぜでしょうか日本人はだれ一人として誉めないので。むしろ差別さえするので。私はウェイターをしていてわかるのです。日本から来る商社マン、団体旅行者、なんでこんなに礼節にかけているのでしょうか。井戸の中のカワズ大海を知らず』と申しますがいざカワズ

大海に飛び出したのは良いが所詮はカワズ大海に方向を失い他国、他国民を考えない郎党と化しているのではないのでしょうか。先日知った私のメキシコ人、スパニョールはその犠牲のような気がしました。よまよま工大の卒業生、在学生その一人ではないでしょうか。『そうでないことを信じています。』

PAOLO SOLERI 言(つ)ました。精神、肉体を錬磨し自己を確立することこそ建築家、人間にとって一つの使命であると。

在学

私と建築基準法

四十四年卒

吉川 澄生

小生が四十四年に、おそれおおくも広島県土木建築事務所へ勤務させてもらう事となって、早くも九年間の歳月が流れ広島県の建築職員の中でもいつの間にか中堅職員と対外的に見られる人間の仲間入をしている今日ではあるが、学生時代、建築基準法と言う法律は単に建築学科の中の一科目としか感じ取っていなかった小生にとって、

社会に出て入った道が、何と、毎日毎日が建築基準法との睨めっこの生活になつてしまった。

建築基準法で、飯を食っていると言つても過言ではない毎日であるが、この基準法と来たら、第一条で、最低の基準を定めると言いながら、なかなかどうして細部にわたり細い規定を行い法律の中では税法に次ぎ理解しにくい法律とまで言われ、又売春防止法に次ぐザル法とも世間で悪口を言われるやつかいな法律で、こうした基準法を親方日丸を盾に、善人振って、強きをくじき、弱きを助ける法の番人として、役不足と知りながら、日夜努力している毎日である。

しかし、こうした不可解な建築基準法であっても、建築を志した者にとっては、職場こそ違え、小生同様避て

通る事の出来ない法律である事は、間違いないのである。

建築基準法が理解しにくいと言われる所以は、何度となく、ビル災害が発生する度に、泥縄式に、部分的な改正改正をくり返して来た事にも原因しているのではないかと小生は考えるのだが……。

小生が、基準法を飯の種とした四十四年にも、現在で言う堅穴区画の導入がなされ、四十五年には、第五次法改正が行われ、形態制限（絶対高の廃止・北側斜線等）の改正、不特定多数の者の利用する特殊建築物等の安全設備基準（排煙設備・非常用照明・非常用進入口等）の強化、耐震構造等の強化がなされ最近では、五十二年十一月に行なわれた基準法の一部改正、施工令の一部改正が行なわれやつと理解しかけた法律だと思えば、又新しい法文が出てくるわけで、小生のような、頭の悪い者にとって、ますます理解しにくくなるのである。

ついでの事に、今回の改正点について、少々触れて見ると、今回の改正の柱は、社会的に問題化して来た日照権の問題に基準法が少しでも役立てばという願いから、日影規制が導入された事にある。もう一つは、太陽デパート火災に代表される増改築工事中の災害防止の為に、増改築工事期間中の既存建築物部分の使用制限の明文化である。

日影規制については、広島県条例に

おいて住居系用途地域について、日影時間を規定し五十三年四月一日より施工される。

こうした一連の規制は、つねに建築物を設計し、又施工して行く上に、かならず考慮しなければならぬわけだ小生が確認事務を行つていて感じる事は、建築家の使命であるより安全で、より快適な住環境を作り上げるべき、使命をも忘れ、最近の基準を定めている基準法すら、おろそかにしているが為、行政サイドでは、最初に宜べたとうり、細部に渡り、規制を行わざるをえない面があり、こうしたいたちごつ的な型を呈しますます、基準法を複雑化しているのではないだろうか。少くなくとも、我々、五三会メンバーは、この様な建築家ではなく、社会的にもより信頼してもらえ建築家でありたいと願う処である。

広島県庁都市部建築課勤務

拜啓 同窓生諸兄殿

四十七年卒

下 健蔵

三日間続いた雪景色もようやく元の色をとりもどした今日このごろ、諸兄には増々ご活躍のことと思います。

扱て、昨年末長女が生まれまして、家に帰っても何をするわけでもないのに気ぜわしくあつという間に時間がたち、思うように勉強もできない有様です。

皆様は如何お過ごしでしょうか。

なかなか同窓生の近況を知る機会もなく、時折、アイツはどうしているのかなと思うことがあつても、いつか忘れてそのままになってしまいます。こんな時、五三会タマリ場（タマリ場とは喫茶店でもどこでもよいが、そこに行けば五三会の誰かがいて話し相手になり、暇な時にはそこに行こうと思う

そういう場所である。いうなれば学生時代に講義を放棄して集まったサークルのタマリ場であり、部室であり、皆のタマリ場であつた誰かの下宿の一室のような場所である。）と称すべき所があればと考えてみるのです。皆様はどう思われますか。私はタマリ場に自然と皆が集まり語り合い、刺激しい発奮剤となればよいと思うのです。自己にとじこもり満足していたのでは進歩も向上もなく、あつたとしてもそれ

は自己満足にすぎないと思います。お互い話し合い討論しあうことによつて発奮もするだろうし、自己満足にも気が付く、もつと自分のしななければならぬことに気が付くと思つたのです。しかしそんなかたくなるしい理屈はぬきにして、暇な者が好きに集つ、そんな場所を作りたいものです。

そういう場所ができたなら、行事とか事業をもつてではなく、自然に五三会の目的である情報交換、相互連絡、互助等を達成することができると思つたのです。願わくば、向上とか進歩するためにつくるタマリ場ではなく、自然発生的に皆が集まる場所（タマリ場）ができ、その結果として、共に話し、刺激しい五三会の目的を達成したいものです。

今、そういう場所があるとすれば、自然発生的なものではないが、皆が集まる場所としては、総会のあとの懇談会ではないでしょうか。少なくとも、この総会にはできるだけ多くの者が集まつて語り合おうではありませんか。いつの日かそんな場所ができることを願いつつ、思いつくまま綴りましまらぬ文となりましたが、会報のペー

ジ数を増やすことには協力したとご容赦願います。最後になりましたが、諸兄のご発展をお祈りしてペンをおきます。

(昭和五十三年二月記)

広島県庁都市部営繕課勤務

可号 八

建築行政に携って

四十六年卒

榎本 好数

早いもので卒業して早くも七年目が過ぎ去ろうとしている。この七年間一体何をしたらか、と考えてみると何もしていない様な気がする。私は就職に先立ち、県庁と市役所のどちらにしようかと考えた末、給料の高い（実際には変わらない様な気がする）、転動のない市役所を選んだ。市役所に入って一番最初に配属された処は建築指導課（現在は建築審査課）であった。建築の確認審査業務をする課である。指導課についてあまりいい印象をもっていなかった。アルバイトをしたことのある建設会社の人の話とか、建築基準法というものから事務屋の仕事の様な気がしたからである。指導課に配属されて最初の印象は電話がこれ程恐ろしいものとは思ってもみなかった。建築基準法の右も左もわからない私に、（電話の相手は指導課の職員は全てベテランとばかり思っている。）基準法の細かい解釈とか、取扱いを早口で質問されると、もう何がどうなっているかさっぱりわからず、しどろもどろになる私だった。以来、電話は余程のことがないかぎりとならないことにしている。それから、確認申請書が提出されると現場をみにいくわけだけれど、実際の現場と配置図をくらべてみると、違いが非常に多い。たいてい敷地を大きく書いたり、道路巾を広くしたり、現場

に行けばすぐバレル様なウソを書くのである。確認申請書には、「この申請書及び添付図書に記載の事項は事実と相違ありません。」と書いてあり、申請者は誓約しているのにこの状態である。これは、建築士が申請者の話しをうのみにするのか、それとも、建築士の立場が弱い為に、申請者の希望する規模の建物を建てる為に、建築士の方で建物に合った敷地でない、道路巾に書き替えるのかわからないけれど、しかし、これではいくらたっても建築士というものの地位は、これから先、何年たっても下がることはあっても上がることはせつたいたいであろう。悲しいことである。もっと自覚と信念を持って立向ってもらいたい。又、立向えるだけの組織的な力も必要なのでないでしょうか。そういう私も今は営繕第二課という所で主に学校関係の図面を書いていますが、そういうごまかしは書きたくないものです。

広島市役所営繕第二課勤務

建築行政

五十年卒

林 憲和

卒業して、早や三年になろうとしています。不安ばかりで市役所に入り、建築審査課というまったく想像もしていなかった課に配属されました。ただ心強かったことは工大の先輩たちが多かったことです。五三会市役所支部の一員となったことから、五三会の幹事に出席するようになり、この会がた

いへん有意義であることを認識し、少しばかりでも役に立とうと思ひ、幹事会の出席、総会の出席などを誘ってききましたが、一番苦手な文章を書くことで参加することになり、困り果ててしまいました。

先程も書きましたが、今、居る課は建築審査課という、行政一本の課なのです。学生るとき、市役所という所は、図面を書くだけでいいように思っていました。それが、内容は設計とは全く縁の無い、建築基準法による確認事務だった。手順は、申請中の受付↓審査↓確認↓着工↓完了↓検査↓検査済と簡単に書けばこうである。これに都市計画法（開発行為、計画道路、調整区域など）、宅地造成規制法、土地区画整理法、その他の法律がからんでくるのである。基準法だけではないのだから、このむずかしさを痛感させられた。（というよりも現在もよくわかっていないのだが。）

これよりもっと困るのは、住民からの通報である。それも基準法以外の民法がらみの問題である。たとえば、隣地とのあき、日照（これは五十三年四月から日影としてある程度規制されるが）、騒音、その他である。基準法とは関係がないため、あくまで指導に止まり、後は、本人同士の話し合いでしかないのである。

こんな問題の起こらない日が一日も早く来ること願っています。

広島市役所建築審査課勤務

鈴が峰団地計画

四十七年卒

生田 文雄

五三会の会員の皆様ご機嫌いかがですか。数年前から続いている低成長経済のもとで、建築界も不況の波をものに受けていますが、その中で皆様は御活躍されていること、思います。今年で広島工業大学建築学科同窓会「五三会」が発足以来五周年をむかえ、ますますの繁栄を心よりお祈り致します。

さて、私は広島市役所に勤務して来、営繕課計画係、工事係、住宅建設課基町計画係、公営計画と渡り歩いて早六年が終ろうとしています。同じ市役所といってもそれぞれの係での特徴があり、悪戦苦闘の毎日です。現在公営住宅の計画設計を行う住宅建設課に勤務していますが、その仕事のうち昭和五十二年度から始まった鈴が峰団地計画を紹介してみたいと思います。

鈴が峰団地は、広島市の西端部、広島湾を一眸に見渡す風光明媚な高台にあり、都心とは自動車専用道西広島バイパス、広電宮島線及び、国道二号線によって結ばれ、しかも、都心の距離は六kmと近く、郊外住宅地としては一等地の立地条件を備えている団地であり、広島湾周辺部丘陵開発の典型例として注目されている団地である。

鈴が峰団地は公営住宅用地、地主還

元用地、戸建用地等全域九十四haで構成され、そのうち公営住宅用地は最上部の六・四haを有しこの団地の主要な一部を構成している地区である。鈴が峰団地開発事業は同時に進められている鈴が峰団地前面の海岸部埋立てによる西部流通センター建設事業（西部開発事業）と一対をなす事業として着手された住宅地開発である。つまり、海岸部埋立用土砂を山から採取しその切土跡地を住宅地として利用しようとする開発計画ですが、山が急峻な為切土跡には文法面が形成され、その法面の有効利用をはかる為に造成計画が検討されていることからセットバック住宅が考えられていた。

鈴が峰団地は、対称軸がほぼ南東に向く扇形地形で水平距離四〇〇メートルに対して高低差九〇メートルもあり南側に小学校、幼稚園をはさんで带状に公営住宅一三〇〇戸その両端に戸建住宅二〇〇戸、北側に公営住宅約八〇〇戸そして団地の中央に保育園と店舗郵便局等の利便施設を一か所にまとめた近隣センターで構成される。

公営住宅用地は高低差の激しい団地の最上部分にありこの団地のシンボリック的建築であるセットバック住宅にはふさわしい場所、こゝからは全団地及び西部開発を見越して広島湾、広島市が一眸できる。この場所は住環境に対しては絶好の場所ではあるが、前述したように鈴が峰山特有の急峻な地形で

の団地造成計画においてほとんどこの部分で高低差を処理されている為全体面積の半数に近い部分が四十五度という建築には不相当とされる大法面で構成されている。また法面に対して前面の平坦部が狭少でしかも法面部の地質が風化花崗岩で全く不利な条件下での計画であった。この敷地を四期に分割して一期二二戸二期二四〇戸三期二三五戸四期一七〇戸合計八五七戸を昭和五十二年度から五十五年まで四ヶ年度にわたって建設する計画で、このうち一期と二期は全て法面を利用してのセットバック形式の集合住宅である

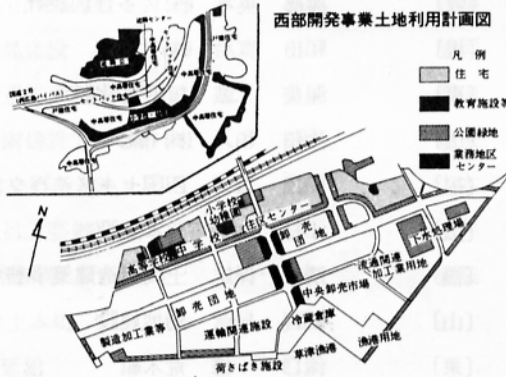
第一期セットバック住宅は四十五度勾配高さ一三メートルの法面に六階建（一F部分駐車場二階六階部分住宅）一棟当り十戸を二棟を建築する計画である。各柱棟は全て同一階では接続され、各戸へは一階部分と一階部分よりアプローチされる。またセットバック住宅の欠点である通風に対処するため片廊下方式を採用した。各住戸に和室三室（六帖＋四・五帖＋四・五帖）と台所兼食事室、浴室、洗面脱衣室、便所と六帖分に相当するバルコニーを持つ規模である

第二期セットバック住宅は一期が南東に面しているのに対して法面が東西に面しているため日照上の問題があり現在計画中である。公営住宅建設事業も昭和五十一年度より始まった第三期住宅建設五箇年計

画によって従来の量的に確保する方向から住生活の質的向上へと政策転換され、最低居住水準及び平均居住水準の設定をして、全ての人々が昭和六〇年までに最低居住水準を確保する計画が提出された。その先鋒として鈴が峰団地は昭和五十六年の初春には青芽と共にその全貌をあらわすはずである。

広島市役所住宅建設課勤務

西部開発事業土地利用計画図



第三回五三会コンペ入選発表

第三期コンペ審査委員長

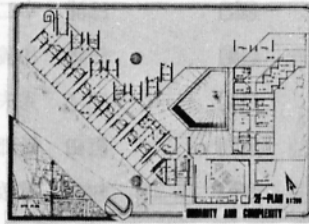
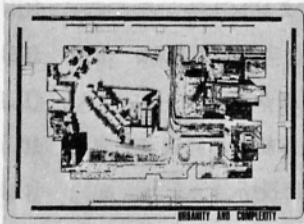
村上 徹

第三回コンペ「平和都市広島に建つ文化センター」の入選が審査員（建築学科教官五名+卒業生五名）の厳正な審査に基づいて下記のように決定されました。今回のコンペは応募数が五点と予想していたよりはるかに少なく、在学生のみの案であったことは非常に残念に思われます。次回は入選賞金も増額し、課題も建築学科全体で考えていただく課題としましたので多数応募していただくようお願い致します。

審査結果を総合しますと、入選一席（山野君他二名）案は市民球場の一部を保存しながら文化センターの一部として再利用し、市民参加の文化センターを意図したアイデアが評価されました。ガラスの大屋根・広場・クラスタのマッス・ローマの廃虚を思わせる市民球場の架構、これらの単独イメージには賛成ですが、全体の再構成には力不足が感じられました。第二席（北村君他八名）案は亀甲プランをうまくこなし、亀甲マッスとマッスの構成によるプラザ・通路・アプローチ等「間の空間」が巧みに構成されようとしています。しかし表現に於て時間切れなところが惜まれ、またそれによって山野君他案に第一席を譲ったと思います。

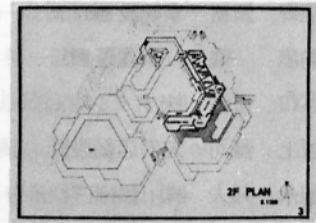
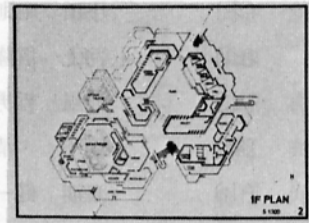
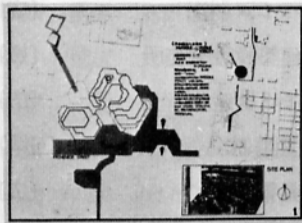
入選一席（賞金10万円）

山野正晴	5 0 5 2 6 7
森田誠二	5 0 5 1 1 2
采本英男	5 0 5 1 6 5



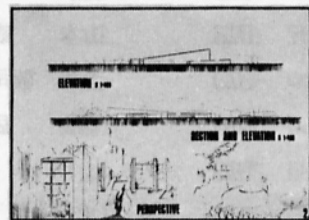
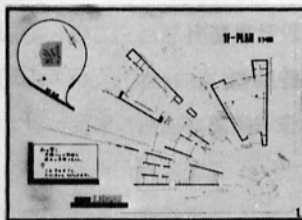
入選二席（賞金5万円）

北村義和	5 0 5 1 8 4	高取良郎	5 0 5 2 1 1
土江淳弘	5 0 5 2 2 0	西原秀樹	5 0 5 2 3 0
井上雅仁	5 1 5 0 1 1	金田義明	5 1 5 1 8 1
両野忍	5 2 5 1 5 2	森 建	5 0 5 1 1 1
高原良彦	5 0 5 2 1 3		



入選三席（賞金3万円）

大森正夫	5 2 5 0 2 0
------	-------------



第四回五三会コンペ作品募集

課題 「広島工業大学建築学科のアトリエ」 応募締切……………昭和53年10月25日（水）正午に締切

る。（郵送の場合は10月25日の消印まで有効とする。）

- 工大構内及びその周辺の敷地を選定し、建築学科のアトリエを設計する。
- 規模・構造は自由想定で良いが、学生・卒業生・教職員相互の接点の場として機能すること。
- ここでは各種研究・会議・ゼミが行なわれ、あるいは設計製図課題での徹夜があるかも知れない。冬はおそらく卒業論文・卒業設計のために、4年生に占領されるであろう。
- 卒業生もまたここを訪れ、これらを利用し、参加することができる。
- 建築学科の集团的・発展的拠点がほしいのである。

提出先……………〒788 広島県佐伯郡五日市町三宅
広島工業大学建築学科事務室

応募資格……………広島工業大学建築学科学生・卒業生
・教職員

入選発表……………大学祭にて発表・展示。

入選賞金……………総額20万円（審査員の決定により配分する。）

審査員……………建築学科設計製図担当教官及び卒業生で構成する。

作品の返却は原則としていたしません。又コンペについての座談会を発表と同時に行ないます。出品された方はもとより、その他の方も多数御出席されますようお願いいたします。

提出図面……………A. — 2枚程度に平面図・立面図・断面図・アイソメ・模型写真・設計主旨等、設計意図を説明するために必要な図面を各自選択して描くこと。

表現方法……………自由とする。

応募記載事項……………作品の裏面に応募者の住所・氏名・電話番号等を記入すること。

第4期五三会コンペ実行委員会

責任者 村上 徹

日本建築学会コンペ全国入選

佳作入選

上之博文（L A T 環境設計事務所）

所）

衣笠准一（近代設計コンサルタント）

ント）

反本正典（フリー）

昭和五十二年度の学会の主催する設計競技のテーマは「買物空間」であった。主旨は商店街は種々の問題点をもっているその解決を計るために買物空間の整備改善を求めるというものであった。テーマ自体が社会的でありランドスケープの分野にあって、建築の設計競技としてはおもしろいテーマであったので、我々の目にとまったのである。我々三人は会社に勤めながらの参加であり、初めての経験であった。

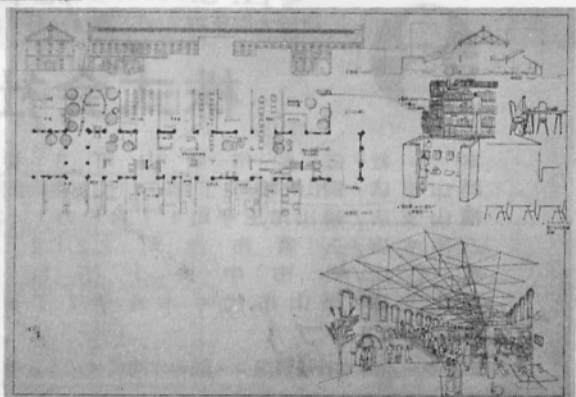
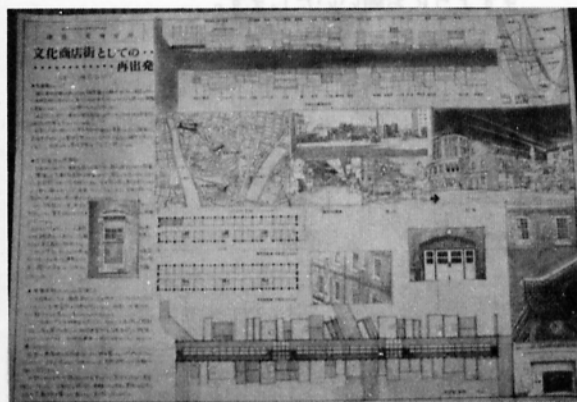
まず買物空間の諸問題を考えるだけとりだして記述していき、それらのグルーピングをした。それらは車の時代に駐車場がないこと、また、すべての品物が横を向けばあるという大規模店舗に客をとられるのは必然だという結果になった。さらに車道をはさんだ商店街は、ギロチンを前にしたよう危険であり、客の吸収力はなくなり大規模店舗に客をとられるのは明らかになったのである。しかし、あえて商店街として生きてゆくためには、大地に接した心のふれあいのある商店街に着目

し、土地柄特色のある商店街は今も生き続けていることを訴えた。

また、計画に対しては、計画対象の商店街の設定において計画が左右し、それについて時間をかけて話し合い、特に現在において独得な地方に対して注目されており、それを生かすよう考えた。それに対しタカノ橋商店街を私達は選び、学生商店街として位置づけこれからも学生商店街として生き続けるため古い学舎をそのまま、商店街にはめこみ、共存をねらって、歴史と接しランドマークとなつて、より活発に生き続けるよう計画し「空間移動」と名づけて提出したものである。

会社に勤めながらのコンペは苦痛であった。もう二度とこんなことはすまいと話した後の入選だったため喜びもひとしおであった。

なお審査員は荻原義信、大高正人、木村俊彦、菊竹清訓、吉阪隆正他諸先生方であった。東京での表彰式には三人そろって出席し吉阪先生との対談にも得ることが多かった。



51 年 度 決 算 報 告

◎ 収 入	繰 越 金	3 9 5,1 6 0
	新会員会費	3 7 0,0 0 0
	会員会費	1 5 2,7 3 5
	広 告 料	1 4 0,0 0 0
	寄 付 金	0
	雑 収 入	6,1 8 7
	計	1,0 6 4,0 8 2

◎ 支 出	会 報 印 刷	1 4 9,8 0 0
	総 合 案 内	3 0,0 0 0
	郵 送 費 切 手	6 4,5 0 7
	会 議 費	5 3,3 0 0
	総 会 援 助 費	1 0 6,9 7 8
	活 動 強 化 費	OB会 2 5,0 0 0
		見学会 0
		懇 談 会 2 6,5 2 0
	コ ン ペ 費 用	2 5,9 1 0
	在 学 生 援 助 費	3 0,0 0 0
	パ イ ト 料	0
	消 耗 品 及 び 雑 費	1 0,8 0 0
	繰 越 予 定 金	0

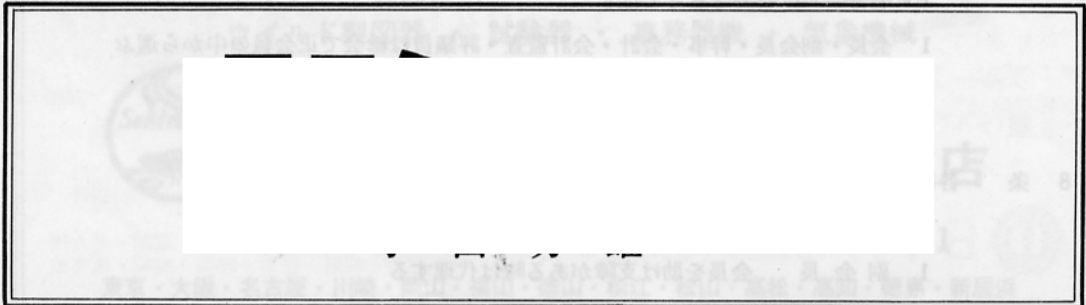
5 2 2,8 1 5

5 2 年 度 予 算

◎ 収 入	繰 越 金	5 4 1,2 6 9
	新会員会費	3 2 8,0 0 0
	会員会費	2 0 0,0 0 0
	広 告 料	1 0 0,0 0 0
	寄 付 金	1,0 0 0
	雑 収 入	8,0 0 0
	計	1,1 7 8,2 6 7

◎ 支 出	会 報 印 刷	1 5 0,0 0 0
	総 会 案 内	6 0,0 0 0
	郵 送 費 切 手	1 0 0,0 0 0
	会 議 費	1 0 0,0 0 0
	総 会 援 助 費	1 2 0,0 0 0
	活 動 強 化 費	OB会 5 0,0 0 0
		見学費 5 0,0 0 0
		懇 談 会 5 0,0 0 0
	コ ン ペ 費 用	2 0 0,0 0 0
	在 学 生 援 助 費	3 0,0 0 0
	パ イ ト 料	5 0,0 0 0
	消 耗 品 及 び 雑 費	1 8,2 6 7
	繰 越 予 定 金	2 0 0,0 0 0

計 1,1 7 8,2 6 7



広島工業大学建築学科同窓会 「五三会」会則

第一章 総 則

- 第 1 条 本会は広島工業大学建築学科同窓会「五三会」と称する。
- 第 2 条 本会は本部を広島工業大学建築学科内に置く。但し、総会で必要と認めた場合に支部を置く事を得る。
- 第 3 条 本会は会員相互の交誼を厚くし、かつ母校建築学科の発展に貢献することを目的とする。
- 第 4 条 本会は前述の目的達成の為に下記の事業を行なう。
- 1 集 会
 - 1 会員相互の連絡並びに共助に関する事
 - 1 会誌及び会員名簿の発刊
 - 1 母校建築学科に対する精神的、物質的援助
 - 1 その他本会の目的達成に必要な事

第二章 会 員

- 第 5 条 本会は下記の者を以って組織する。
- 1 会 員 広島工業大学建築学科卒業生
 - 1 客 員 母校職員及び旧職員
 - 1 名誉会員 本会の発展に貢献し、名誉会員としてふさわしいと総会で認められた者。

第三章 役 員

- 第 6 条 本会は下記の役員を置く。
- | | | | |
|---------|-----------|--------|-----|
| 1 名誉会長 | 置くことができる | | |
| 1 会 長 | 1 名 | 1 副会長 | 2 名 |
| 1 会 計 | 2 名 | 1 会計監査 | 2 名 |
| 1 幹 事 長 | 1 名 | 1 幹 事 | 若干名 |
| 1 評 議 員 | 各卒業年度に若干名 | 1 書 記 | 2 名 |
- 第 7 条 本会の役員は次の方法で決める。
- 1 名誉会長は総会をもって推す
 - 1 会長・副会長・幹事・会計・会計監査・評議員は総会で正会員の中から選ぶ
 - 1 幹事長は幹事の中から互選する
 - 1 幹事は総会の議決により正会員の中から委嘱する
- 第 8 条 各役員はそれぞれ次の任務をもつ。
- 1 会 長 本会を代表し会務を統べる
 - 1 副 会 長 会長を助け支障がある時は代理する
 - 1 会 計 会計事務に当る

- 1 会計監査 会計を監査する
- 1 幹事長 会務を主宰する
- 1 1 幹事 会務を処する
- 1 評議員 会務を評議する

第 9 条 役員の任期は一カ年とし再任をさまたげない。但し欠員は役員会にはかり補充しこれによって就任した者の任期は前任者の残りの期間とする。

第 四 章 顧 問

第 10 条 この会に顧問若干名をおく。

- 1 顧問は総会の議決により適任者を委嘱する
- 1 顧問は会の諮問に応じる

第 五 章 会 議

第 11 条 会議を分けて定期総会、臨時総会及び役員会とする。

第 12 条 総会は最高の議決機関で毎年 5 月に開く。臨時総会は役員会が必要と認めた時会長が招集する。

第 13 条 総会は次のことを決める。

- 1 会則の変更と改正
- 1 決算及び予算
- 1 役員改選
- 1 その他重要な事

第 14 条 役員会は会長が必要と認めた時招集し、次のことを決める。

- 1 総会に附議する原案
- 1 この会の運営に関する諸事項
- 1 その他緊急事項の協議

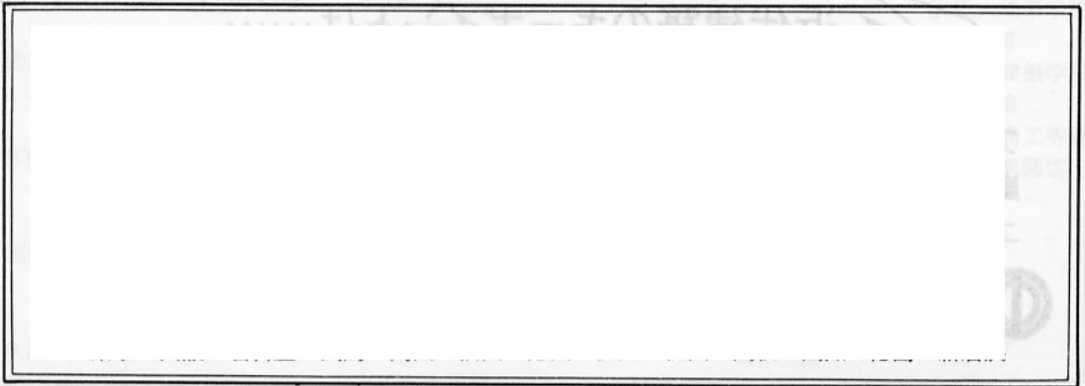
第 15 条 会議の議決は会員の参加者の過半数をもって決定し、賛否同数の時は議長がこれを決定する。

第 六 章 会 計

第 16 条 この会の経費は会費、寄付金及びその他の収入をあてる。

- 1 会員は入会金として、入会時に 1,000 円を納入しなければならない
- 1 会員は年間会費として 1,000 円を納入する

第 17 条 この会の会計年度は 4 月 1 日に始まり、翌年 3 月 31 日に終る。



編集後記

- ▶ 「五三会」創設して五年目。1つの節として五周年記念誌を発行しようと起案されて3ヶ月。予算(資金)が足りない。原稿が集まるであろうか?誰がどのように編集するか等々。組織力の亡しい「五三会」ゆえ不安材料ばかりであった。
- ▶ 「個人では限界がある。しかし個人が集まり組織となれば無限の可能性はある」と、スポンサー集め・情報の収集・原稿集め・編集に分担し多忙な仕事(本業)の合間、奮走したものである。
- ▶ ここに刊行された会誌そのものよりも、工大OB生が目的を1つに心を1つに、お互いに協力し合い、会誌を創作、編集してきた過程に本当の意義があるのではあるまいか。
- ▶ 「五三会」会誌のために広告を出稿して下さいました、スポンサー各社、並びに原稿資料をお寄せ下さいました広島工大の先生方には同窓生一同心より御礼申し上げます。

～ かねほり ～

今回も、さまざまの方面で活躍されておられる卒業生の記事を書きましたが、工大建築科には、数十名の女性の方も、活躍されていると思います。次回には、是非とも、多数の女性の方からの記事も載せたく思っております。

～ さかもと ～

春1番、大慌の前に天下永大産業がついに倒産してしまった。永大社員として自覚と誇りに満ち職務に若き情熱を燃やしていた古き時代が偲ばれる……。広島工大が内部充実と蓄積により無限に発展することを祈りつつ、我々OBも何かの役にたちたいものである。大学の社会的評価はOBが創るものかも知れない……。

～ 永大OB生 ～

会結成5周年記念にあたり社会多方面にわたって活躍されている同窓生の姿を頼もうしく又、誇りに感じている次第です。

これを契機に「五三会」に対するより一層のご理解をいただき、又会員相互間の連絡を密にしますますこの会が充実するようご協力お願いします。

最後に皆様の御多幸御繁栄を祈っております。

～ いくた ～

このりっぱな会報でまた1つの「つながり」が出来ればと思う。

～ 予野の ～

広島の手或社を訪ねた折〇〇会社OB談話室という、ルームを見かけた。長年務めた会社を気軽に訪ね、旧い友、旧い同僚と懐古談にさぞ楽しく有意義なときが過ごせることであろうと羨望したもの……。

我々にも県庁の下君のエッセイにあったようなOB生のたまり場がほしいもの……。喫茶店でもいい、誰かの事務所でもいい早く何処かに、OB生のたまり場を設けたい。そこで将来のユメ談に花を咲かせよう。

OB会館建設構想や広島都市再開発構想などデツカイ話しがしたい。

～ I子 ～

この記念号が広工大卒業生の間をより一層強く結び付せるものとなるよう、編集担当者として期待する次第です。

～ なかじま ～

「五三会」第5号編集委員

金 堀 一 郎
坂 本 和 人
村 上 徹
生 田 文 雄
中 島 伸 夫
上 野 博 文

広島工業大学建築学科同総会会誌

「五三会」第5号 記念特集号

編集責任者 金 堀 一 郎
発行責任者 知 野 吉 春
印刷所 大日本印刷株式会社
発 行 昭 和 53 年 3 月 20 日

『 い つ み か い 会 』

『 い つ み 会 』 広島工業大学建築学科同窓会